石小だより

～すてきな大人に育つ～

宇部市立黒石小学校
コミュニティ・スクール
校報第８号
11月
令和3年11月1日

読書こそ全ての学びの基礎

～量の保障が「書き言葉」の保障に：年間 100 冊以上を～

「ああ楽しかった。あ、校長先生。うちの組ね、2 冊読んでもろうたけえ！」
拍手を終え、教室の窓から顔を出した子どもが嬉しそうに教えてくれました。
朝の読み聞かせが約 2 年ぶりに再会された朝のことです。マスクをずらして笑顔を見せ「よかったね」と言葉を返しながら、まずはボランティアの皆様への深い感謝の念を抱き、コロナ禍にありつつも着実に戻りつつある日常を実感しました。そして喜ぶ子どもたちを見ながら、読書の持つ大きな意義を改めて考えました。

昨年度 11 月の学校だよりでお伝えしたとおり、母語の語彙（ごい）が「話し言葉から書き言葉に移行」する小学生の時期に、**「書き言葉」をいかに大量に身につけるか**がとても大切になります。子どもたちの会話や SNS でのやり取りに**「うっせぇわ」という話し言葉**はよく使われても、**「遠隔地の観測」などという書き言葉**はまず使われません。しかし子どもたちが生きていく未来の社会は、この「書き言葉」で成り立ちます。
そして残念ながら、その「うっせぇわ」のような短い話し言葉だけのやり取りを繰り返すだけでは、「読み取る力（読解力）」は身につきません。まして人の心を推し量るような温かな心、深い思いもなかなか育ちません。なぜなら日本語の語彙は、ほとんどが「書き言葉」にあるからです。
「えんかくちのかんそく」を、前後の文脈から「遠隔地」「観測」へと脳内で漢字に置き換え、「の」という助詞でつなぐ作業。つまり日本語の中の「書き言葉」を自分のものとすることができる力をつけてこそ、初めて他者の話を深く聞き取り、学び合うことができます。そして人の心の動きを捉え、意味と感情のやりとりをしあう「コミュニュケーション能力」の基礎も身につきます。頭の柔らかい小学生のうちに、この**「書き言葉」を大量に身に付けるためには読書しかありません**。つまり、教科学習をはじめ、全ての学びの基礎は読書にあるのです。

ではどれくらいの数字が目安となるのでしょうか。それが標記の、「年間 100 冊」です。100 冊を超え更に 300 冊を超えると理解も速度も格段に高まり次の段階に移行します。練習量がある一定を超えるとぐんと伸びる現象は「量質転換」と言い、武道や芸術、スポーツ全般にも通じるので保護者の皆様の中にも体感された方も多いと思いますが、読書の場合まずは「100 冊という絶対量」が質の深化と定着への第一目標値です。

そう考えたとき、読書をめぐり本校の図書館利用について心強い数字があります（移動図書館を除く）

	元年度	２年度	３年度（上半期）
◎ 年間貸出冊数	２３，３１７冊	３０，４６３冊	１８，０４９冊
◎ 年間来館者数	１４，７９０人	２９，７９８人	１６，５０６人

貸し出し冊数も来館者も年度を追うごとに増えており、来館者など半期（9月いっぱいまで）で、すでに元年度の数字を上回っています。これは日々の授業や委員会活動など学校での取り組みが充実してきたと同時に、保護者の皆様のご配意のおかげさまです。心から感謝申し上げます。
11 月を迎え秋も深まり、まさに灯火親しむ候となりました。100 冊は目的ではなく目標です。読書を通じて子どもたちの豊かな育ちと未来を「大人総出」で保障するのが目的です。秋の夜長、読書に最適なこの時期に、是非とも親子で楽しみながら本を読み進めてくださるよう願ってやみません。　　（校長　小松茂文）